

論文要旨

本稿の目的は、自閉症者の母親による子どもの障害の開示・秘匿の選択にはいかなる背景があるのかを明らかにすることである。

自閉症者が他者とのコミュニケーションを不得手とする症状を持つことで、母親はその代弁者となり、それゆえ「母親—子ども」という閉塞関係が生じる。そして、そうした母親の負担を軽減するような存在として、子どもの障害を理解し、応答ができる者が、彼女らにとっての「心の支え」になるといわれる（渡邊 2016）。本稿は、そうした心の支えを充足可能とする母親の実践、すなわち、自閉症者の母親による子どもの障害の開示・秘匿の実践を規定する背景の分析を研究主題に設定する。

以上の研究課題を達成するため、本研究は障害者を否定的に処遇する理論、「健全者の理論」を分析概念として援用する。我々の常識には「障害者」と「健全者」を区別する仕組み、そしてさらに、「障害者」を周縁に追いやることを通してのみ「健全者」が中心にいていけることができるという、「健全者」による「障害者」への差別のしくみがある。（中略）こうした理論構造を、「健全者の理論」と呼ぶ（要田 1999：18）。健全者の理論は、我々が健常者の生活様式や価値、身体を基準とする社会で生きること、だれもが覚えるものであるが、障害者の母親は、我が子に障害があることをきっかけに、この理論に大きく囚われる者となる。

母親による子どもの障害の開示・秘匿の選択に対する背景を研究主題とする本稿にとって、健全者の理論は、もはや、本研究の核心的な答えであるように思われる。しかし、健全者の理論は障害者差別を受ける立場の者にとって、自身への被差別を予感させる参照点となる一方、母親と子どもという二者関係において、母親はその予感をだれに向けるのか、つまり、子どもの障害の開示・秘匿を自身、子ども、もしくは両者、これらのだれにとって重要と認識しているのかを判然とさせない。

そこで本稿は、先行研究をもとに健全者の理論の派生的規範と考えることができる、「愛情規範」と「子どもを管理する規範」を援用した。愛情規範の内面化は、母親に子ども優先志向という開示・秘匿の背景を、子どもを管理する規範の内面化は、他者優先志向という背景を形成し、母親はこれら2つの背景のもと、子どもの障害の開示・秘匿を選択するというのが本稿の仮説である。

以上の仮説をみていくため、本研究は自閉症者の母親の質的データ（インタビュー・データ）と量的データを用いる。

まず3章と4章では、母親の基本的な認識枠組みを明らかにする。次に障害者の母親による子どもの障害の開示・秘匿の相手は、実際には多様であることから、開示・秘匿の対象を、5章では夫と祖父母、6章では健常児の母親、7章では公共空間の見知らぬ他者というふうに分け、彼女らの実践を規定する背景を分析した。

3章の分析結果

自閉症者の母親は健常者の母親として子育てをする期間がある。その期間をへて、自閉症概念を参照するようになった母親たちは、子どもを障害者として生んだことに罪責感を持ち、その責任から自閉症概念の知識の習得や療育に取り組む。つまり、出産に関する責任がその後の子育ての原動力となる（渡邊 2016）。

母親は出産の責任から療育などの専門的な子育てに進みだすため、子育ての仕方に対する免責を得つつも、あらゆる子育てから解放されていない。健全者の理論は、出産への罪責感を与え、リハビリテーショ

ン思想——「「障害」は治すべきものであり、治さなければならない」——の論理（要田 1999：18）に基づく療育に母親を邁進させていた。

4 章の分析結果

質的分析から始まった本章は子どもの障害を開示することへの母親の抵抗感が、子ども優先志向に基づく主観的被差別感——子どもへの差別を回避するため、子どもの障害を秘匿する——から形成されていることが明らかになった。同時に、抵抗感は、母親が子ども優先志向に基づく開示のメリット——他者による子どもへの障害理解のために子どもの障害を開示する——に気づくことになる、3つの要因に影響を受けていた。その後、本章は混合研究の手法を取ることで、それらの要因の妥当性を検証する量的分析を行った。分析では、開示への抵抗感が徐々に低下する「時間の要因」、および、子どもの障害が特別支援学校等の所属から公になることで、開示への抵抗感が低下する「所属の要因」が有意な効果を示した。

5 章の分析結果

5 章では自閉症者の母親によるミウチへの子どもの障害の情報共有（＝開示）・秘匿の背景について明らかにした。夫への子どもの障害の情報共有は、母親が課せられる愛情規範、すなわち、仮説1の「子ども優先志向」に起因していた。母親は、健全者の理論によって障害を持つ我が子の成長の見通しが立たなくなるが、愛情規範によって、リハビリテーション思想を志向しながら子育てに向き合う。新たな子育てが子どもの成長にとって欠かせないものとして母親に認識されており、子どもと日常的に関わる夫にも子どもの障害の情報を共有する。というのも、夫が子どもを健常者として認識したり、専門的な子育てを否定したりすることは、子どもの発達不全に繋がりがかねないからだ。「祖父母」への子どもの障害の情報共有・秘匿は、子ども優先志向と他者優先志向の背景が備わりつつも、子どもの障害の診断・疑いが出る前の時点における母親と祖父母の相互行為の経験に規定される。相互行為の基準は、祖父母が子どもの行為を問題視しているか否かというものであった。さらに、5章の結論部では、子どもの障害を理解しようとしなない／知らないミウチがいることで、“私は子どもを理解している”という発想による、ミウチ内の序列を母親が形成していることも示した。

6 章の分析結果

6章の開示・秘匿の対象は普通学級に在籍する「健常児の母親」である。普通学級という場において、子どもの逸脱行動に対する自閉症児の母親の解釈は子どもの障害の開示・秘匿の選択にとって重要な基準である。子どもが逸脱行為を頻繁に示すと母親が認識する場合、子どもの行為が迷惑となり、謝罪の意味で子どもの障害の開示は実践される（他者優先志向）。一方、「我が子は健常児のように振る舞えないが、障害があることまでは気づかれていない」といった認識を持つ母親は、子どもの障害の情報を健常児の母親に隠そうとする。これは、子ども優先志向と、仮説外となる「母親優先志向」——自身への差別の回避——を背景とする。後者に関しては、母親がマジョリティに囲まれていること、加えて、5章のように専門的な子育てへの邁進という自己肯定の材料がここでは無意味化することに起因する。さらに本章では、障害の秘匿志向を持つ母親が、一方で子どもの障害を開示した、同じ境遇の母親、さらに、良好な関係を持つ健常児の母親との関係を築いていることを明らかにした。前者との関係形成のきっかけは、母親優先志向——自身の理解者を得るため——に基づく開示である。一方、後者との関係形成は、相手の健常児の母親との良好な付き合いが前提にある。自閉症者の母親は、健常児の母親と良好な関係を築くことで、子どもの障害を隠しておくことへの後ろめたさから解放されるため（母親優先志向）、子どもの行為が相手

の母親の迷惑になることを防ぐため（他者優先志向）、子どもの障害を開示する。

7章の分析結果

7章の開示・秘匿の対象は公共空間の「見知らぬ他者」である。公共空間で自閉症者に同行する母親は、子どもが示す逸脱行為への管理を徹底していた。母親は、子どもが人々に戸惑いや不安、憤りを与えないようにするため（他者優先志向）、加えて、人々が子どもに向ける否定的な解釈や反応から子どもを守るため（子ども優先志向）、子どもに対する管理責任への認識を強化・肯定していた。実際の管理の仕方は、子どもをしつける、自閉症の症状の定義の応用、という2つに分けられ、母親はこれらを実践することで、子どもによる秩序の乱れを阻止しようとしていた。

以上より、仮説となる背景は他者との相互行為に応じて、多様に機能することが明らかにされた。母親は、子どもの行為が他者に問題視されていたり、気づかれているといった主観的基準を見出す。「問題視されている・気づかれている」という場合は、他者が子どもの行為に迷惑や不快を感じているとし、子どもの障害を開示する傾向にあった。つまり、他者優先志向である。一方、子どもの行為が、「問題視されていない・気づかれていない」という場合は、子どもを守るために、子どもの障害を秘匿する傾向にあった（子ども優先志向）。

では、このような基準が生じるのはなぜか。それは母親の語りをみるに、自閉症の症状とされる行為が、わがまま、変わったなど、卑近なものを含むことで、他者がそうした行為を示す子どもを障害者として認識するか否かといった部分で、母親による背景（子ども優先志向・他者優先志向）の受け取り方も変わったからである。「障害者のはずがない」「子育ての仕方のせいである」「普通と変わらない」といった他者による母親への言葉や振る舞いは、自閉症者のなかにはノーマルな存在として扱われる可能性を持つ者がいるということである。無論、自閉症概念に依拠する母親にとって、そうした言葉や振る舞いは的外れとして理解される。自閉症者への差別を主題とした本稿は、自閉症者に対する他者の認識を始点に、彼らへの差別を研究する必要性を提示したといえる。

そして最後に、障害学の視点から、自閉症者の母親による子育てがいかに健常者を中心とする社会に拘束されているかを検討した。